

## 点描

## 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No. 2

1958  
昭和33年

宗祖七百回忌を伝える児連のキャラバン。200カ寺以上を巡回

「宗門白書」に呼応した  
北海道教区青少年教化委員会

一九五八年(昭和三十三年)、北海道教区では「北海道教区青少年教化委員会」が発足した。教区青少年教化委員会は、同年一月七日に辞令伝達式と第一回総会が開かれ、役員を選出、今後の運営方針や青少年運動の実態などについて活発な議論が交わされている。

委員長には山本良超氏(第五組良念寺)が選出され、副委員長には竹田照真氏、長沢祐恵氏が総務部長・児童教化部長、黒田吾吾氏が保育部長、横山英秀氏が仏青部長、北秀一氏がスカウト部長という構成。

委員会発足に先立つ一九五六年(昭和三十一年)、「宗門白書」が発表されている。

宗門白書は、青少年教化の現状を見据えて、「この憂うべき宗門の混迷は、どこに原因するのか。」

宗門が仏道を求める真剣さを失い、如來の教法を自他に明らかにする本務に、あまりにも怠慢であるからではないか。今日宗門はないが間の仏教的因習によって、その形態を保っているにすぎない現状である。寺院には青年の参詣は少なく、従って青壮年との溝は日に日に深められてきているではないか」と、求道の心を失ったあり方を厳しく問いただしている。

宗門白書発表の翌年、教区は「仏青特設定例線」を募集するなど、青少年教化に対する動きを活性化し、さらに同年七月には仏教青年連盟・ボーイスカウトの全国大会を北海道で開催。委員会発足はこれらの動きに対する具体的な展開と捉えることもできる。

委員長に就任した山本良超氏は次のように語った。

「その時代に於ける青少年の問題は、何時の世に於いても取上げられて来てはおり、わが宗門に於いても青少年運動の歴史は永い。然し青少年運動は歴史が永いとか、ある時代に必要であるというものではない。特に仏法を根幹とし仏道僧伽の精神に立脚する仏教青少年運動に至っては論を俟つまでもない。今日時代的要請の上より青少年に真の仏道精神の上より、人生を見つめて行くことが内外共に叫ばれている折、我々宗門人は一刻も早く自分の座に於いて青少年の友垣を生み出す努力をしなければならぬと思う。」

若々しい血を燃えたぎらせ、人生の姿に真剣な眼をそそぐ彼等青少年と真の手のつながりが出来ないとするならば、教団がかける僧伽も教法も、それはあくまで觀念とのしられ、生きる我々には無関係だと横を向かれることは必定であり、現にその証明が一つの寺院に冷たく迫ってきてはいないだろうか。

現実には諸々の困難もあり、障壁にもぶつかりはするが、然しそれにひるんでは何の前進もなく退嬰のみが限りなく続く。」

氏の言葉は、宗門白書と同様に、五十年を経過した今も色褪せることはない。